シンポジウム

「医の倫理」といわゆる Bioethics——医学史的考察

川喜田　愛郎

本日の会合もまさにその一例だが、近年わが国でも「医の倫理」あるいはいわゆる「バイオエシックス」を主題にうたった討論ないしシンポジウムがあちこちで催される。言うまでもなくそれは現在われわれをとりまく状況がその古くまた新しい問題に対する人の関心をとみに鋭くしつつあるためだが、忌憚なく言ってその論議が往々充分に嚙み合わないきらいがないでもないのは、もとよりそれらの課題の本質的な困難に基づくには相違ないのだが、一面そこに目立つのは歴史的文脈の理解を欠いた論点の混乱である。いま与えられた短い時間の許す範囲で対象の分析を試みたい。

いわゆる“medical ethics”の歴史をたずねる際に誰でもまず思い出すのは「ヒポクラテス集典」にみられる有名な「誓い」(Oath, Horkos) である。ピュタゴラス派の医師集団の入門時の誓約と推定されているその短い文章には、内容的に若干の疑義がないわけではないが、その深い影響が西欧中世から今日にまで及んでいることは周知の通りで、現に例えば世界医師協会が一九四八年の総会で採択した有名な「ジュネーヴ宣言」がその精神に則って起草され、いわばその現代版とみられることによってもその消息の一端がうかがわれるだろう。

新ヴィーン学派の巨匠 Hermann Nothnagel もつとに（一八八二）指摘しているように、医師の応接する対象が単なる「病気」でなしにいつも「病人」であるからには、医療は技術であると同時に、本質的に倫理的行為であるとみるべきだ

ろう。ここで注意しなければならないのは、上記の「誓い」が、その成立の趣意を反映して、対患者の問題もさることながら、医師の行状（conduct）一般への指示に多くの言葉がさかれている点である。そのことは、いわゆる医の倫理が話題になるときにかならず引用される有名な Thomas Percival の "Medical Ethics"（一八〇三）にもなるともう一つ鮮明である。この古典的文献は、その副題にも示されているように、医師なる「プロフェッション」（これを「職業」という現代日本語に不用意に訳してはここでは原意を損ずる惧れがある）の社会に向けて公示するいわゆる "professional code" であった。そこにはそれを要請する社会情勢が存在した。前記「ジュネーヴ宣言」をはじめとして近年諸団体から公表された各種の「倫理」文書の多くもそれとおおむね軌を一にする。当然のことながらそこには患者に対する医師の倫理的姿勢に関する指針なり陳述なりはいつも含まれていたにはしても、それは多くの場合、ヒューマニティーとか生命の尊厳とか健康の貴さとかをうたい上げるいわばたてまえ論にとどまっていたようにみえる。もとよりわたくしはここで、あの古代には稀にみる高い科学性とそれに同伴する深いヒューマニズムの精神とによって今に尊崇される大ヒポクラテスをはじめとして、その後今日に至る無数の有名、無名の医師たちが、病人の「悩み」（pathēma, Hippocrates）に正しく応えようとして行動してきた事実から目を離しているわけではない。それとこれとは話が別である。

ところで、はじめに記したように、最近、医の倫理の問題があらためて人々の鋭い関心事になるに至った背景には、二つの大きな時代的な問題があるように思われる。一つには、とくに今世紀中葉以後の科学技術の躍進的な進展に伴う医学・医術の目覚ましい変容、一つには近代社会の構造とその中にある人々の意識の変化、がそれである。「医の倫理」の現代史を考えようとすれば、当然その両面と、そしてまたその二つが絡み合ったところに生まれたさまざまの困難な問題とに学問的なきびしい検討が要請されねばなるまい。

かの「医は仁術」という言葉に象徴される医療の "paternalism" が今日しばしば批判の的となっていることからもその一端がうかがわれるように、社会の変化は直接・間接さまざまな形で医の倫理の問題にも強く反映するのだが、話をあま

り多岐にしないために、ここでは科学技術の急激な進歩がもたらした影響に話題を絞ろう。当節しばしば論議の的となる臓器移植、脳死、人工体外受精、遺伝子工学の孕む医学的可能性、等々がその目立った実例のいくつかである。

もとよりそれによって医師・患者関係をめぐるヒポクラテス以来のさまざまな issue の重さがいささかも失われたわけではないにしても、いま例示した「新しい酒」が前述の意味での "medical ethics" や、またともすれば観念的に終始しがちのいわゆる「医道」論の「古い革嚢」に収めきれないことは、近年 "Bioethics" なる新しい言葉が登場して今発酵の過程にあることからも察するにかたくないだろう。最近脚光を浴びつつある "Bioethics" なる概念の吟味と、そのなお未熟な言葉にやみくもに押しこまれているさまざまの問題を具体的にとりあげることは本席のわたくしに与えられている任務ではないが、ここではその新しい動きの科学史的・医学史的な背景を分析することによって、医の倫理——so-called "medical ethics" でなしに——における「不易」と「流行」の諸相を手探りする試みに及ばずながら挑んでみたい。

（千葉大学名誉教授）

（詳細は「科学医学資料研究」—野間科学医学研究資料館—第一三三～六号に発表予定）